様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６４３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０３２７

研究課題名（和文）イングランド国教会『欽定説教集』とシェイクスピア

研究課題名（英文）The Books of Homilies of the Church of England and Shakespeare

研究代表者
郷　健治（GO, Kenji）

帝京大学・外国語学部・教授

研究者番号：５０２６６２８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,000,000円、（間接経費）　900,000円

研究成果の概要（和文）：イングランド国教会の『欽定説教集』の「死への恐怖を戒める説教」の文言が『夏の夜の夢』に反映されていて、その事実がこの喜劇の解釈に大きな意味を持つ、という論考を長短２本の英文の論文として完成させた。また、英語の近代的な意味での「（流行する服飾の）ファッション」というfashionの概念が誕生したのが、１６世紀後半の英国であり、この概念が同説教集の「華美な服装を戒める説教」のfashionの使用例によって誕生した可能性が大きい、という事実を発見し考察した。また、これまで注目されていなかったフォルジャー図書館所蔵の１６８５年の国教会の反カトリック説教集の歴史的な重要性に関しての英文論考を完成させた。

研究成果の概要（英文）：I completed two English articles that explore the inter-textual relationships between Shakespeare's A Midsummer Night's Dream and 'The Homily against the Fear of Death' in the Books of Homilies. Also, I found that the birth of the modern sartorial sense of the word 'fashion' can be traced back to the latter half of the sixteenth-century in England, and that it most probably happened due to the repeated use of the word 'fashion' in 'The Homily against the Excess of Apparel'. I also came across a little-known 1685 broadsheet of anti-Popery Homilies of the Church of England in the Folger Library, Washington, D.C.,and completed a full-length English article on its historical singnificance.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：イギリス　英文学　シェイクスピア　キリスト教　イングランド国教会　欽定説教集　書誌学　ルネサンス演劇

１．研究開始当初の背景

本研究開始時の背景は、本研究者の2008~2010年度の科研費採択課題「イングランド国教会の宗教的言説とシェイクスピア」の研究開始時の背景と基本的に同じである。

（１）『欽定説教集』二巻（*The Two Books of Homilies*；第１巻初版 1547 年；第２巻初版1563年；以下、適宜、『説教集』と略す）は、シェイクスピアの時代にイングランド国教会において毎週日曜日と祭日の礼拝中に朗読された欽定の説教集であり、この時代にはイングランド国教会の日曜・祭日の礼拝への出席は全国民の義務であり、新聞もラジオもテレビも存在しなかった当時のイングランド社会においては、この国教会の説教集は、同一のメッセージをまったく同一の言葉で全国民に伝達できる唯一の「マスメディア」的なひじょうに重要な言語媒体であった。

この『欽定説教集』の教会での説教壇用のfolio 版が１７世紀から１８世紀世紀末まで（1623, 1633, 1635, 1640, 1650, 1673, 1676, 1683 (London), 1683 (Oxford), 1713, 1726, 1757, 1766, 1799年と）断続的に出版され続けた事実から、この『説教集』の英国社会における歴史的な重要性が容易に推察できる。したがって、この『説教集』二巻本は、シェイクスピア研究のみならず、１６－１８世紀のイギリス文学・宗教・思想・歴史・社会研究の第一級の基本文献であるはずである。にもかかわらず、この『説教集』２巻のリプリント版は、1930年代以降つい最近まで、７０年余りの長期間にわたって絶版状態が続き、入手困難であった。そのため、今日に至るまで、シェイクスピアの作品（あるいは、同時代の英文学作品）とこの『説教集』のテクストとの関連性を総合的に考察した研究は少なく、これは現在のシェイクスピア研究（そして、１６・１７世紀英文学研究）の大きな未開拓領域といえる。

（２）また、この『欽定説教集』二巻本の書誌学的研究は、1859年にオックスフォード大学出版より刊行された John Griffiths の校訂版（*The Two Books of Homilies Appointed to Be Read in Churches*）にある‘A Descriptive Catalogue of Editions of the Homilies to the End of the Seventeenth Century’(pp. xlix-lxxvi) がこれまでその唯一の本格的な研究であり、『欽定説教集』の数々のエリザベス朝版と 1623 年のジェームズ朝版、そして、それ以降の１７世紀～２０世紀初頭までの数多くの諸版の書誌学的な研究は、これまでに本研究者が２００９年の Notes & Queries に発表した論文（‘A Bibliographical Note on the 1623 Jacobean Edition of the Book of Homilies’）を数えるのみである。

（３）この『説教集』は、これまで我々日本人英文学研究者にとって無縁の存在だった。たとえば、英訳聖書とキリスト教思潮に非常に造詣の深かった碩学斎藤勇先生の名著『イギリス文学史』（初版 1949 年）を繙いてみても、この『欽定説教集』の名は本文はもとより脚注でさえ触れられていない。本研究者の知る限り、これまで『欽定説教集』とシェイクスピア、あるいは、他の英文学作品との関連性を論じる研究は日本では皆無であった。また、２０１４年５月現在、NACSIS Webcat を使って日本全国の大学図書館の蔵書を検索してみても、この『欽定説教集』の１６・１７・１８世紀版の原本はただの１冊も見つからず、その二巻本の現代版の校訂版やリプリント版やファクシミリ版でさえ、日本中の大学図書館にわずかに６冊しか登録されていないのである。

２．研究の目的

（１）『欽定説教集』の書誌学的研究。

１６・１７世紀のイングランド国教会の『欽定説教集』２巻の書誌学的研究は、前述のように、1859 年にオックスフォード大学出版より刊行された John Griffiths の校訂版（*The Two Books of Homilies Appointed to Be Read in Churches*）にある‘A Descriptive Catalogue of Editions of the Homilies to the End of the Seventeenth Century’(pp. xlix-lxxvi）があるのみである。この Griffiths による１６・１７世紀の諸版のリストに登録されていないイングランド国教会の『欽定説教集』の版が存在するか否かをじっさいに確認する。そのために、『欽定説教集』の１６～１９世紀の諸版を数多く所蔵した図書館で書誌学的なリサーチをする。

（２）エリザベス朝版『欽定説教集』２巻の宗教的言説とシェイクスピア諸作品の関連性の研究。

シェイクスピアが当時のロンドンの観客たちがくる年もくる年も毎週教会で聴かされていた『欽定説教集』の中の説教のさまざまな宗教的な文言・言説を下敷きにして劇作品を執筆していたであろうことは、想像に難くない。しかしながら、そのテクスト上の関連性を探求した研究はこれまでにあまりにも少なく、本研究者が Oxford 大学大学院に２０００年に提出した博士論文の一部、およびそれ以降に発表した何本かの英文と和文の論考に加え、あと何本かの英文論考を執筆し、英米の専門誌に発表し、できるだけ近い将来に、全体を１冊の英文の研究書（仮題：*Shakespeare and the Books of Homilies*）としてイギリスの出版社から刊行する。

３．研究の方法

（１）本研究の最終年である３年目に、The British Library と並んで、１６・１７世紀のイギリスの出版物を世界で最も数多く所蔵するアメリカの首都ワシントン DC にある Folger Shakespeare Library に赴き、所蔵されている『欽定説教集』のすべての版を実際に手に取って書誌学的なリサーチを行った。（２０１３年５月）

（２）エリザベス朝版『欽定説教集』２巻の宗教的言説とシェイクスピア諸作品の関連性の研究は、日々、シェイクスピアの諸作品を読みながら、（すでに本研究者が通読してその内容を把握している）『欽定説教集』２巻のテーマや文言との関係を考察していく、という地道な作業のなかで、その両者のテクストの関連性を考察していった。

４．研究成果

（１）昨年５月の米国 Folger Shakespeare Library における１週間におよぶ『欽定説教集』の書誌学的なリサーチの結果、まったく思いがけない大きな発見があった。フォルジャー図書館の電子カタログ Hamnet にはなぜか未登録で、図書館の古い紙媒体のカード・カタログだけに登録されている、１６８５年刊行の（一見まぎれもないイングランド国教会の説教集の抜粋と思われる）folio 版１枚を二つ折りにして両面４ページに印刷された broadsheet で、そのタイトルが、

‘THE / Church of England / As by LAW Established:/ Being the very *DOCTRINE* and express Words of the / *HOMILIES* against *POPERY*”（「法により設立されたイングランド国教会：カトリックに反対する説教の教義と言葉」)、というひじょうに興味深い出版物を発見した。これは、これまでの『欽定説教集』の書誌学的な研究ではまったく触れられていない版であり、い

ったいこの 1685 年という、こともあろうにカトリック教徒であるジェームズ２世が即位したまさにその年に、なぜこのような反カトリックのイングランド国教会の説教集の抜粋が刊行され得たのか？という不可解な問題に取り組んだ。

帰国後、２０１３年の夏から秋にかけて詳しく研究調査した結果、この版は、Wing の Short-title Catalogue にも（現在の）English Short Title Catalogue Online にも The Church of England の出版物として登録されているものの、John Griffiths の１６・１７世紀の『欽定説教集』カタログのリストには登録されていない版であることがわかった。しかしながら、じつは、この broadsheet は国教会の刊行物ではまったくなく、１７世紀末のホイッグ党の急進派の代表的な人物であったイングランド国教会の牧師 Samuel Johnson（1649-1703）が獄中で編纂し、イングランド国教会の刊行物であるかの如き体裁で刊行した broadsheet であることが判明した。

それまで１６・１７世紀に刊行された『欽定説教集』がすべて教会用で、ゴシック体の読みにくい文字の書物だったのとは対照的に、この１６８５年の broadsheet は一般読者にむけて刊行された、読み易いローマン体の活字で印刷された、新聞のような手軽な出版物だった事実は注目に値する。すなわち、この１６８５年の反カトリックの broadsheet は、英国史上初めて、一般の読者が手に取って読むことができた『欽定説教集』の画期的なテクストだったのである。これが、あたかもイングランド国教会の公的な刊行物であるという体裁をとり、当時、コーヒー・ハウスが盛況だったロンドンで、多数の読者に読まれたことにより、当時の世論に影響して、反カトリックの社会的土壌形成に大いに役立ち、わずか３年後の名誉革命（１６８８年にカトリック王ジェームズ２世が追放された革命）をもたらす「革命的な文化」形成に貢献した可能性が十分にある、この broadsheet は英国史上注目すべき刊行物であった可能性がある、という論考を、英文約９０００語の論文として今年の春に完成し、イギリスの専門誌に投稿し、現在、査読の審査結果待ちである。

（論文名：‘The 1685 Broadsheet of the ‘HOMILIES against POPERY’, the Reverend Samuel Johnson, and the Glorious Revolution’）

（２）まず、本研究１年目には、『欽定説教集』の「死への恐怖を戒める説教」が『夏の夜の夢』の有名な「ボトムの夢」のセリフの下敷きになっている可能性が大きい、という（筆者が２００７年に和文論考として発表した論文の）主題をさらに探求し、関連する多数の英文論文・研究書を読み、この主題がこの劇作品全体に及ぼす影響への考察を深め、最終的には１万語余の長文の英文論考を執筆した。これをイギリスの英文学研究専門誌（*Essays in Criticism*）に投稿したところ、１年近く査読審査の結果が決まらず、けっきょく、高い評価は得たものの、この論文の内容が「ひじょうに専門的な論考なので、弊誌よりも Shakespeare Quarterly や Review of English Studies に掲載されたほうがふさわしい論文である」という結果だった。そのため、この論文に加筆修正して、イギリスの専門誌(Shakespeare Survey)に昨年春あらためて投稿した。ところが、この論文が長すぎたため、残念ながら掲載を断られてしまった。そこで、再度、この論文を再考し、書き直して、今年の春、９０００語の論文（‘Bottom’s Dream Reconsidered in Light of the Homily “An Exhortation against the Fear of Death”’）と３７００語の論文（‘Bottom’s Dream Revisited’）の２本の独立した論文に分割し、仕上げた。前者はアメリカの専門誌に

投稿し、後者はイギリスの専門誌に投稿し、現在、査読の結果待ちである。

そして、本研究２年目の２０１２年には、近代的な意味での「（流行する服飾の）ファッション」という'fashion'の概念が誕生したのが、一般に信じられているように、１７世紀初頭のフランスではなく、じつは１６世紀後半のイングランドであり、この概念がイングランド国教会の『欽定説教集』第２巻の「華美な服装を戒める説教」の中の fashion という言葉の３度繰り返された使用例により誕生した可能性が高い、という注目すべき発見をした。

西洋服飾史やファッション学の分野では、１４世紀後半にイタリアで「ファッション現象」が発生し、それがその後スペインやオランダやフランスやドイツ、イングランドへ伝播していった、というのが定説である。ところが、それでは英語の fashion、そして、フランス語の la mode という近代的な意味での「（流行する服飾の）ファッションやモード」という概念がいつ、どこで、どのように誕生したか？という問題に関しては、これまで専門家の間でも定説も本格的な研究もなかったようである。（なお、フランス語以外の他のヨーロッパ言語や中東の諸言語は、最新の OED Online 版の mode の項で説明されているように、1630 年代以降、フランス語の mode を借用している。fashion という言葉をすでに 1550 年代から近代的な服飾のファッションという意味で使用している英語は、じつは、ヨーロッパの諸言語の中で例外的な存在なのである。）

また、fashion という言葉をもっとも（２０数回も！）多用しているシェイクスピアの劇作品は『空騒ぎ（Much Ado About Nothing）』であり、この喜劇がじつはこの「華美な服装を戒める説教」という教会の説教のパロディ的な要素を含み、当時の fashion にうつつを抜かす貴族階級を風刺した作品でもある、という可能性が大いにある、という面白い事実にも気づいた。この発見の概要を昨年５月の米国プリンストン大学でのシンポジウムにおける３０分の招待講演で発表し、好評を得た。この fashion の概念の誕生とシェイクスピアの作品に関する発見は、今年の秋のシェイクスピア学会で発表したい。

さらに、この春には、『ハムレット』の冒頭に登場する、ハムレット王の亡霊のセリフの中に、イングランド国教会の『欽定説教集』２巻の中で、Purgatory（煉獄）の存在を最もはっきりと否定している一節の文言を彷彿とさせるセリフがある、という面白い発見もあった。この亡霊が、（カトリックの教義が認めるような）煉獄からの亡霊なのか、そうではなく、じつは、（プロテスタントの立場から見た）地獄から来た悪魔の仕業なのか？という問題は、この『ハムレット』という英国文学史上最も有名な悲劇の核心的な問題である以上、この発見は注目に値する、と思われる。今後、できるだけ早く英文論考としてまとめ、発表したい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① Kenji Go, ‘Montaigne’s “Cannibals” and *The Tempest* Revisited’, *Studies in Philology*, vol. 109, no. 3 (2012), pp. 455-73.（査読有）

② Kenji Go, ‘Biblical Echoes In The "Roar" Of "Lions" In *The Tempest*, II.I.313–14’, *Notes & Queries*, vol. 255, no.3 (2010), pp. 405-08.（査読有）

☆この論文が、間もなく刊行される予定の *Shakespearean Criticism: The Tempest*, ed. Steve Mentz (Layman Poupard Publishing: Bristol, 2014?) に収録される。

③ Kenji Go, 'On the Origin of the "Common Houses" as Brothels in Measure for Measure', *Notes & Queries*, vol. 253, no. 2 (2008), pp. 191-94.（査読有）

☆この論文が、来年刊行される予定の *Shakespearean Criticism: Measure for Measure*, ed. John Higgins (Layman Poupard Publishing: Bristol, 2015?) に収録される。

〔学会発表〕（計３件）

① Kenji Go, 'Any Thought on Islamic Fashion? –- The Birth of "Fashion", Shakespeare, and the *Books of Homilies*' 2013 年 5 月 3 日　*Symposium in Celebration of an Extraordinary Career: Andras Hamori, Cleveland E. Dodge Professor of Near Eastern Studies* (プリンストン大学教授アンドラシュ・ハモーリ教授退官記念シンポジウム)
（於米国プリンストン大学）

② 郷健治、セミナー「『ソネッツ』解釈の展望」のコーディネーター。
★他のセミナー・メンバー4 名は、高田康成教授（東京大学）、阿部曜子准教授（津田塾大学）、大矢玲子教授（慶応大学）、廣田篤彦准教授（京都大学）。
+郷健治、「*SHAKE-SPEARES SONNETS* の 1609 年初版 Quarto の出版事情再考」。2012 年 10 月 14 日　第 51 回シェイクスピア学会（於秋田大学）

③ 郷健治、「シェイクスピアと W.H.氏とウィリアム・ハーバート」　2012 年 5 月 27 日　第 84 回日本英文学会全国大会（於専修大学）

〔図書〕（計０件）

６．研究組織
(1)研究代表者
郷　健治（GO Kenji）
帝京大学・外国語学部・教授
研究者番号：50266285

(2)研究分担者
(3)連携研究者